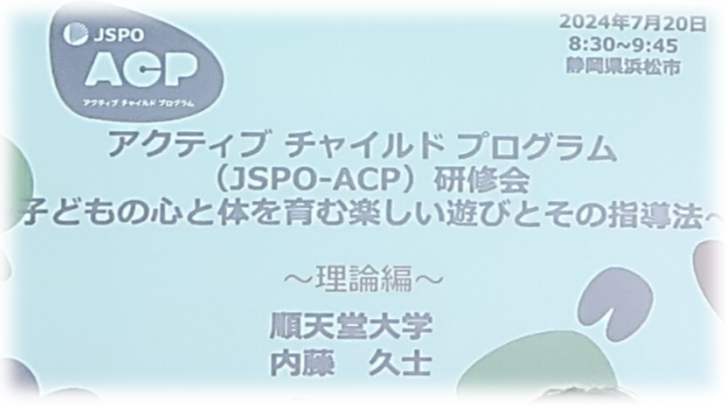
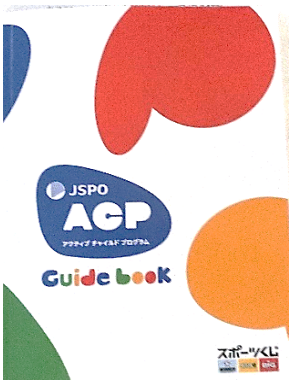
日本スポーツ協会　指導者　研修会

2024.7.20　浜松市可美総合体育館

参加者　浅井隆夫、西村　環、西村静流、
大橋広子、大橋千秋





第３期スポーツ基本計画（R4.3.25)

東京オリンピック・パラリンピック競技大会（東京大会）のスポーツ・レガシーの発展に向けて、

重点的に取り組むべき施策　「新たな３つの視点」

① **スポーツを「つくる／はぐくむ」、**

② **「あつまり」、スポーツを「ともに」行い、「つながり」を感じる、**

③ **スポーツに「誰もがアクセス」できる、**

と具体的な施策をお示している。

第３期スポーツ基本計画（概要）

［第２期計画期間中の総括］

① **新型コロナウイルス感染症**：
➤ 感染拡大により、スポーツ活動が制限

② **東京オリンピック・パラリンピック競技大会**：
➤ １年延期後、原則無観客の中で開催

③ **その他社会状況の変化**：
➤ 人口減少・高齢化の進行
➤ 地域間格差の広がり
➤ ＤＸなど急速な技術革新
➤ ライフスタイルの変化
➤ 持続可能な社会や共生社会への移行

こうした出来事等を通じて、改めて確認された
・「楽しさ」「喜び」「自発性」に基づき行われる本質的な『**スポーツそのものが有する価値**』（Well-being）
・スポーツを通じた地域活性化、健康増進による健康長寿社会の実現、経済発展、国際理解の促進など『**スポーツが社会活性化等に寄与する価値**』
を更に高めるべく、第３期計画では次に掲げる施策を展開

１．東京オリ・パラ大会のスポーツ・レガシーの継承・発展に資する重点施策

持続可能な国際競技力の向上
○ 東京大会の成果を一過性のものとせず、持続可能な国際競技力を向上させるため、
・ NFの強化戦略プランの実効化を支援
・ アスリート育成パスウェイを構築
・ スポーツ医・科学、情報等による支援を充実
・ 地域の競技力向上を支える体制を構築

共生社会の実現や多様な主体によるスポーツ参画の促進
○ 東京大会による共生社会への理解・関心の高まりと、スポーツの機運向上を契機としたスポーツ参画を促進
○ オリパラ教育の知見を活かしたアスリートとの交流活動等を推進

スポーツを通じた国際交流・協力
○ 東京大会に向けて、世界中の人々にスポーツの価値を届けたスポーツ・フォー・トゥモロー（SFT)事業で培われた官民ネットワークを活用し、更なる国際協力を展開、スポーツSDGsにも貢献　（ドーピング防止活動に係る人材・ネットワークの活用等）

大規模大会の運営ノウハウの継承
○ 新型コロナウイルス感染症の影響下という困難な状況の下で、東京大会を実施したノウハウを、スポーツにおけるホスピタリティの向上に向けた取組も含め今後の大規模な国際競技大会の開催運営に継承・活用

地方創生・まちづくり
○ 東京大会による地域住民等のスポーツへの関心の高まりを地方創生・まちづくりの取組に活かし、将来にわたって継続・定着
○ 国立競技場等スポーツ施設における地域のまちづくりと調和した取組を推進

スポーツに関わる者の心身の安全・安心確保
○ 東京大会でも課題となったアスリート等の心身の安全・安心を脅かす事態に対応するため、
・ 誹謗中傷や性的ハラスメントの防止
・ 熱中症対策の徹底など安全・安心の確保
・ 暴力根絶に向けた相談窓口の一層の周知・活用

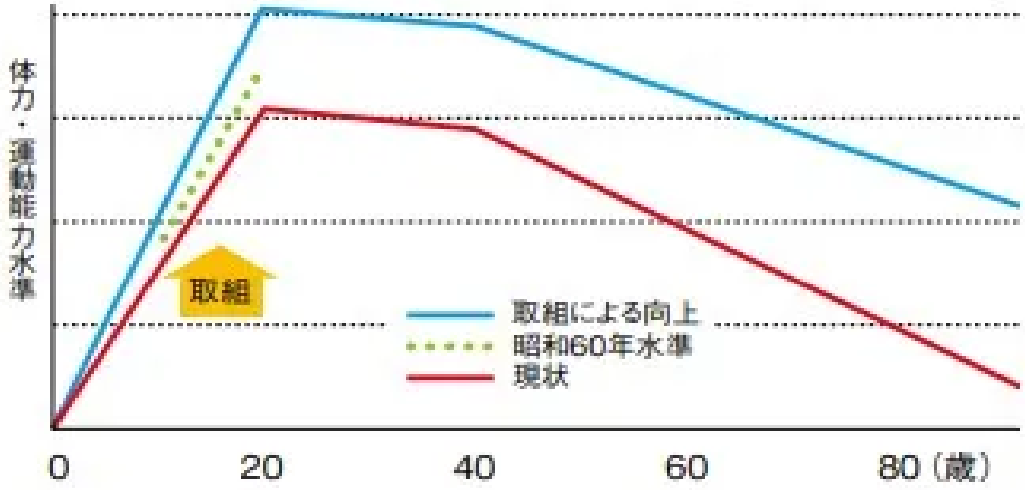
２．スポーツの価値を高めるための第３期計画の新たな「３つの視点」を支える施策

スポーツを「つくる / はぐくむ」
社会の変化や状況に応じて、既存の仕組みにとらわれずに柔軟に見直し、最適な手法・ルールを考えて作り出す。
◆ 柔軟・適切な手法や仕組みの導入等を通した、多様な主体が参加できるスポーツの機会創出
◆ スポーツに取り組む者の自主性・自律性を促す指導ができる質の高いスポーツ指導者の育成
◆デジタル技術を活用した新たなスポーツ機会や、新たなビジネスモデルの創出などDXを推進

スポーツで「あつまり、ともに、つながる」
様々な立場・背景・特性を有した人・組織があつまり、ともに課題に対応し、つながりを感じてスポーツを行う。
◆ 施設・設備整備、プログラム提供、啓発活動により誰もが一緒にスポーツの価値を享受できる、スポーツを通じた共生社会の実現
◆ スポーツ団体のガバナンス・経営力強化、関係団体等の連携・協力による我が国のスポーツ体制の強化
◆スポーツ分野の国際協力や魅力の発信

スポーツに「誰もがアクセスできる」
性別や年齢、障害、経済・地域事情等の違い等によって、スポーツの取組に差が生じない社会を実現し、機運を醸成。
◆ 住民誰もが気軽にスポーツに親しめる「場づくり」等の機会の提供
◆ 居住地域にかかわらず、全国のアスリートがスポーツ医・科学等の支援を受けられるよう地域機関の連携強化
◆ 本人が望まない理由でスポーツを途中で諦めることがない継続的なアクセスの確保

子供の体力低下　昭和60年がピークでドンドン下がっている。



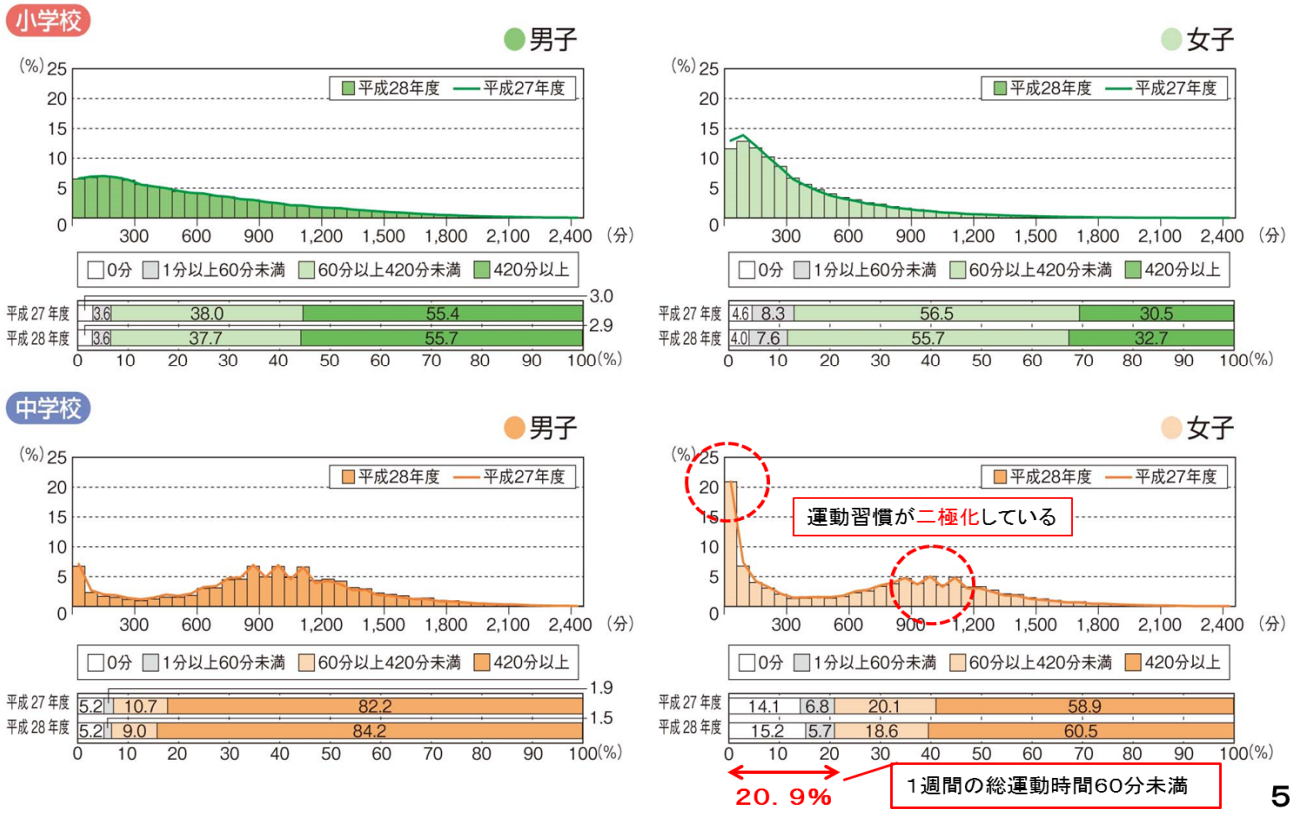
体力向上の取組と年齢による体力･運動能力の変化

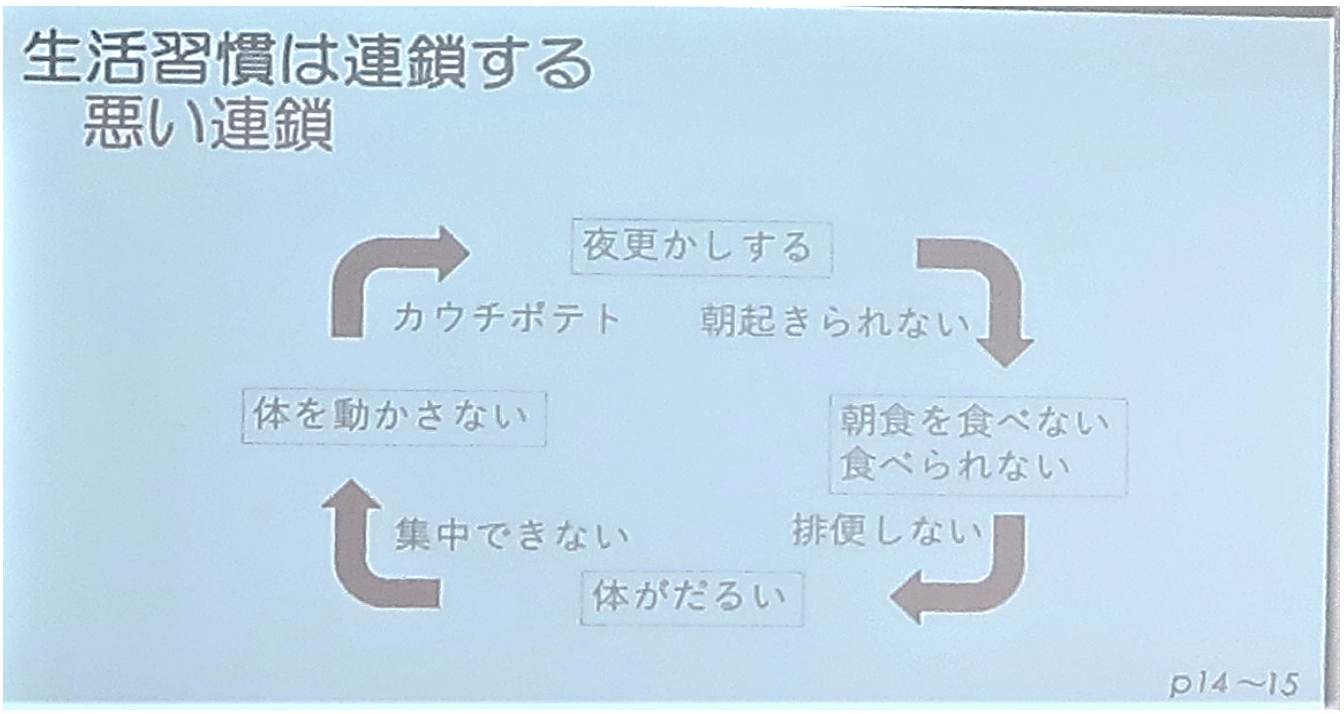
運動しない！食べるものに困らない！　　女性の痩せ問題も大きな課題！

一日1時間が「世界のスタンダード」　　1週間で420分

これに満たない日本人の「未達成者の改善が問題」

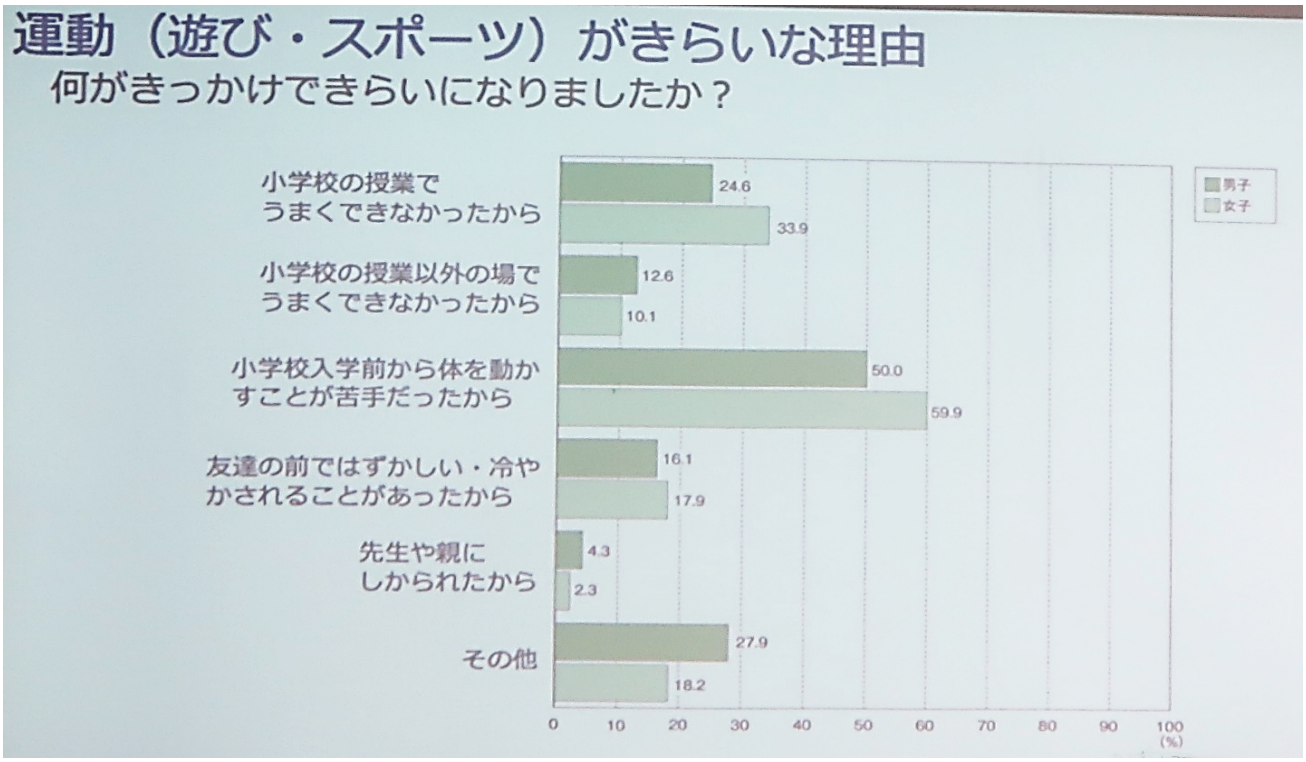
１週間の総運動時間の分布と前年度との比較

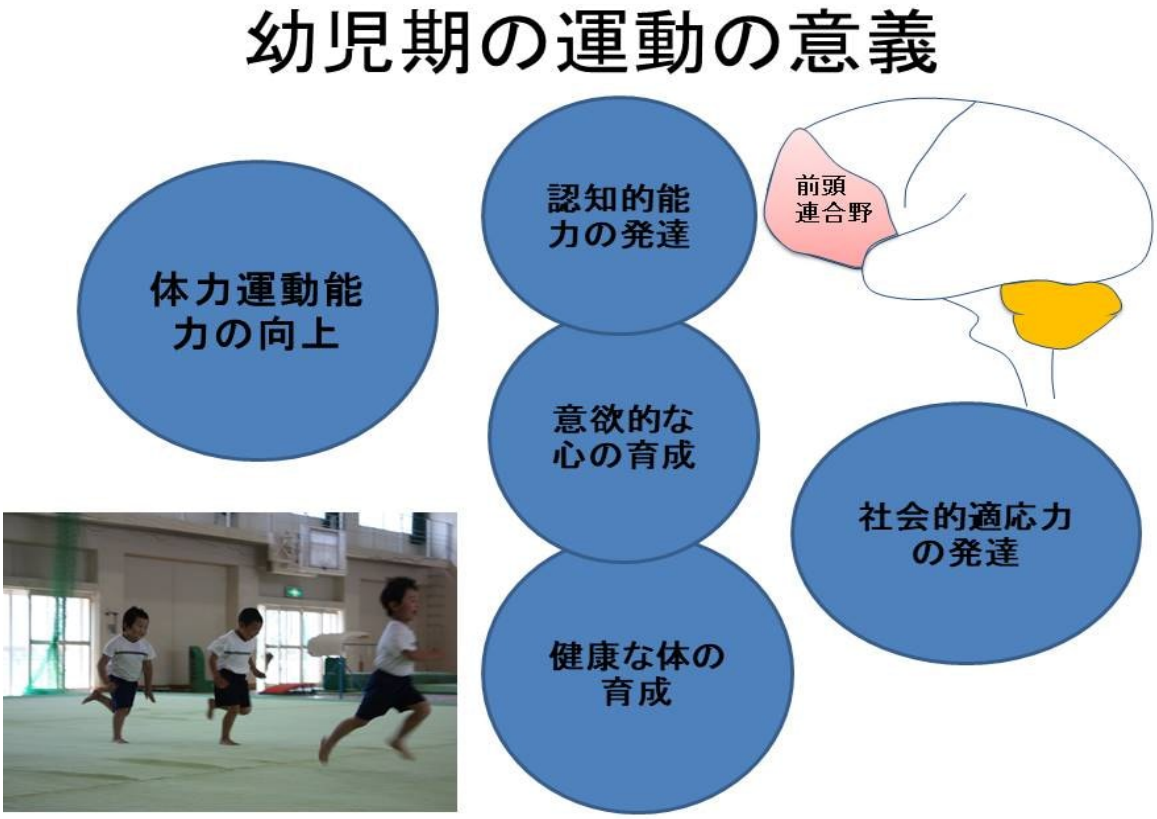




運動・スポーツが嫌いになった理由

1.小学校前から嫌い！・・・幼児教育の重要性
2.小学校の授業で上手くできなかった。





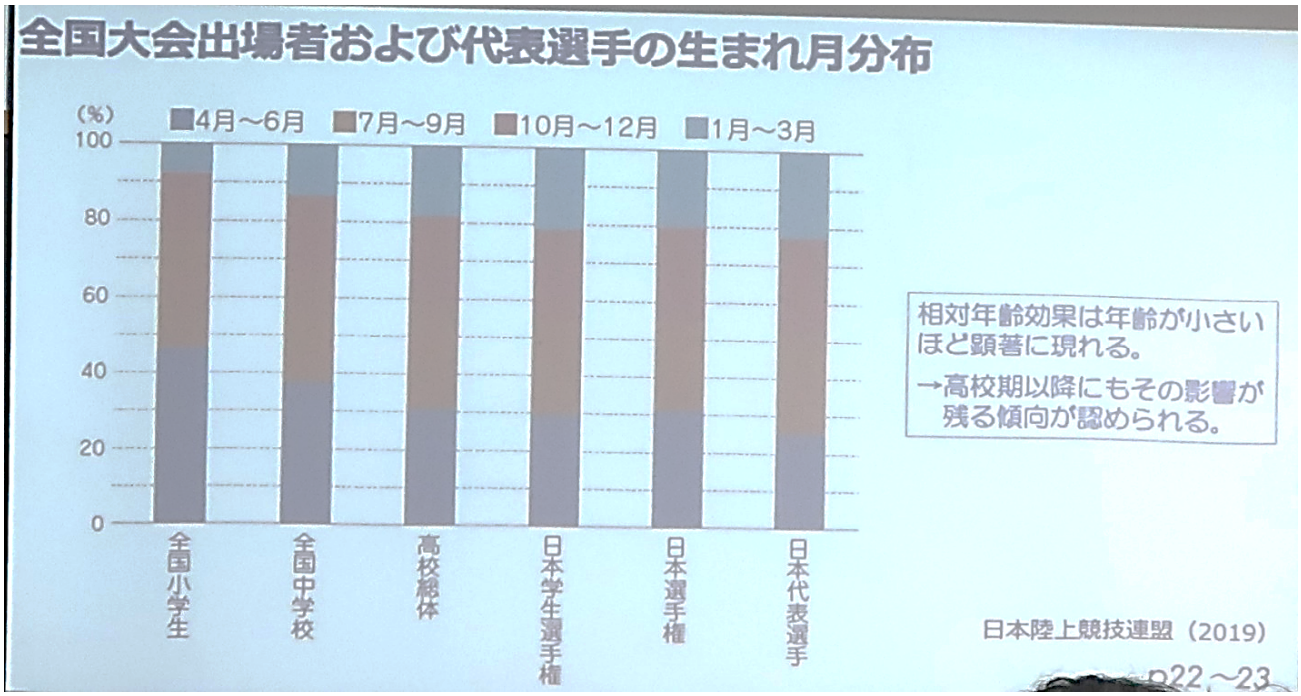
文部科学省
幼児期運動指針（H24年3月）

- 文部科学省では、平成19年度から21年度実施した「体力向上の基礎を培うための幼児期における実践活動の在り方に関する調査研究」を実施してきた。
- 社会環境や生活様式の変化は、子どもにとって、遊ぶ場所、遊ぶ仲間、遊ぶ時間の減少、交通事故や犯罪への懸念などが、体を動かして遊ぶ機会の減少を招いている。
- 結果として、幼児期からの多様な動きの獲得の遅れや体力・運動能力に影響している。

全国大会出場者数　生まれつき分布

4月～6月生まれは、多い！

高校以降にも影響が残る！　　**大会内容を精査！**

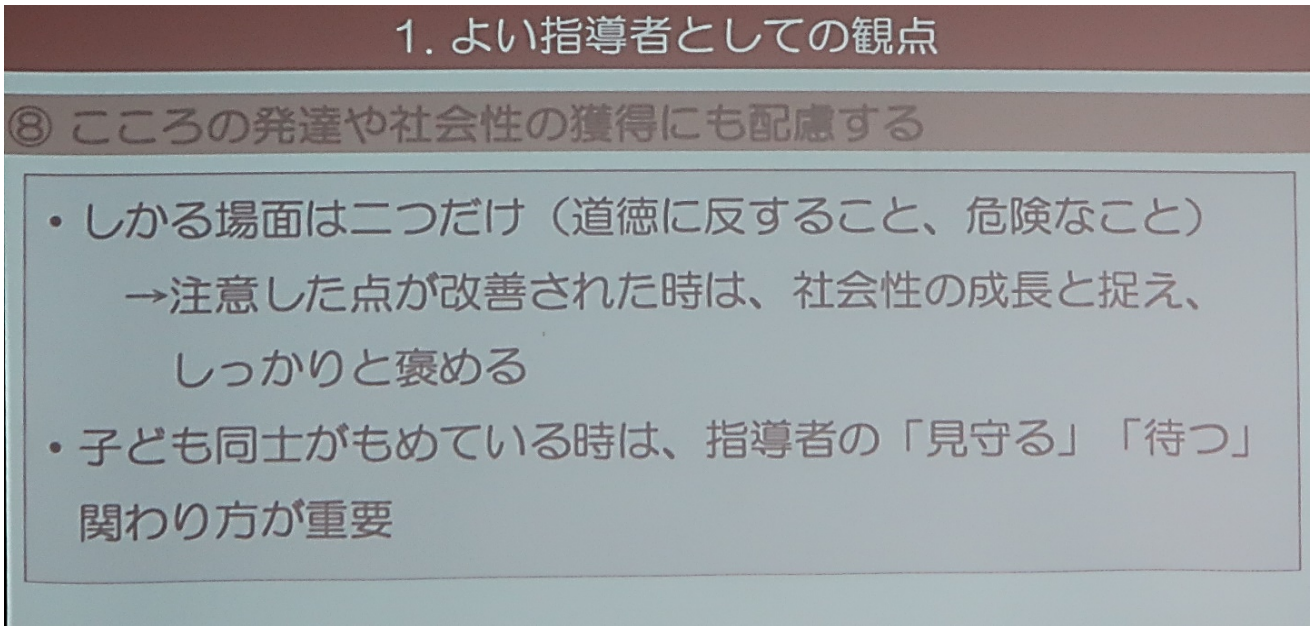
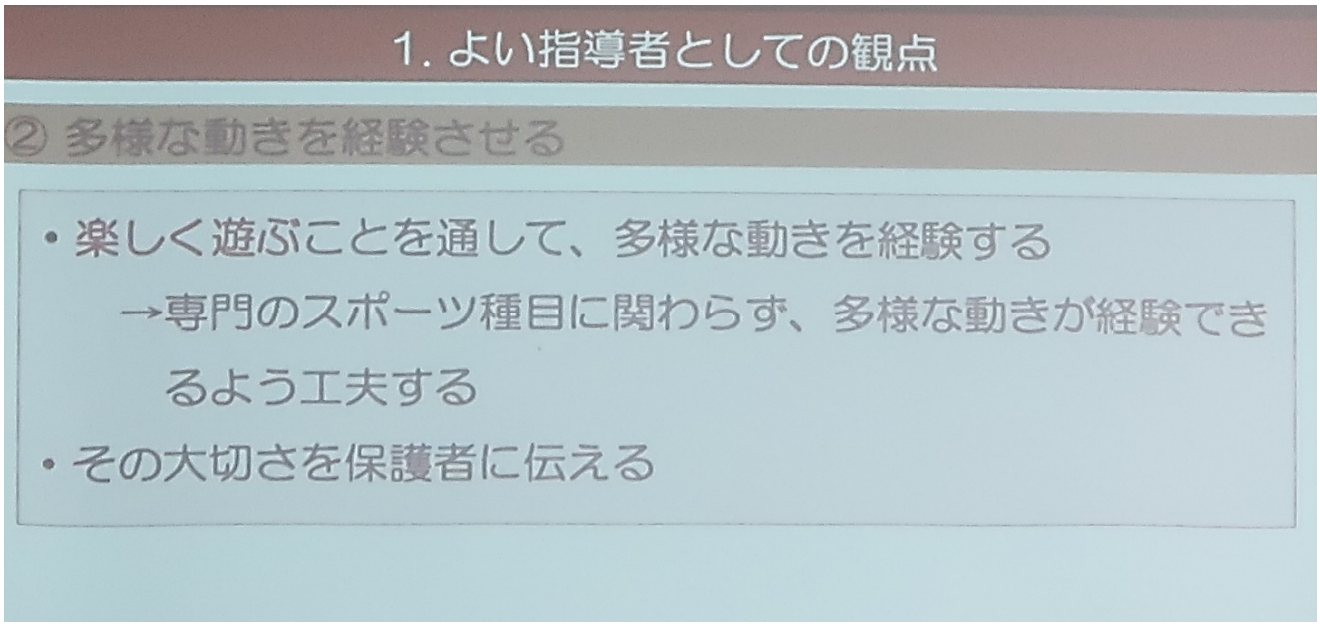


良い指導者の観点

〇叱る場面は、二つだけ

道徳に反する行為

危険な行為

〇子供同士のもめごと

見守る！待つ！